

優秀賞『新島襄に学ぶ教育者の理想の姿』山田 澤

私が新島襄を知ったのは、学校の倫理の授業だった。彼が同志社大学の創設者であるを知った時、「いつか学校を設立し、経営したい」という、今はまだ漠然とした夢を持つ私にも、どこか通ずるものがあるような気がした。このコンテストへの執筆を通して、その夢を確固たるものにしていきたいと思う。

私は将来、自身が経営する学校を立ち上げたいと考えている。そこで私が目指す学校は日本にとどまらず、世界で幅広く活躍できるような人材を育成するということである。

私は以前オーストラリアでのホームステイに参加した。そこで気づいたのは、国際的なコミュニケーションにおいて、学校で教わるような英文法の知識はさほど必要ないということだった。そういったことよりも、他者の違いを受け入れ、自身には持っていない「常識」のようなものを認め合い、自身から主体的にコミュニケーションや生活を行うことの重要性に気づかされた。そこで私は、「～しなければならない」といった概念を優先する現状の閉塞的な教育を打破し、自分とは異なる価値観や文化を持つ人々の多様さを受け入れることができる寛容性や、自らの興味がある対象へ関わることへの自主性を伸ばすような学校を設立したいと考えるようになった。

また、それだけでは国際的に活躍できる人間は育成できないと思う。さらに重要なことは、国際的に「自立」した人間、すなわち、世界の諸課題を自身のこととしてとらえ、行動できる人間を育成したいと考えている。これらの人材は新島が考えた「良心」を持った人材と共通点が多いように思う。

私はそのような考えから、生徒会長としてロシアのウクライナ侵攻問題に関して人道支援募金を企画した。その時の私は一人の国際人としてウクライナの人々の助けになりたいという使命感に突き動かされていたように思う。多くの人々の協力もあり、企画時の想定を遥かに上回る協力を得ることができた。生徒会の公式 SNS では、沢山のウクライナの方から感謝のコメントをいただくことができ、海外とのある種絆のようなものを感じることができた。将来教える生徒の前に自身も国際的に自立した人間であらねばと強く感じる。

これらのことから、私の設立したい学校では自由な教育と異文化理解、自主性の育成を最も大切にしたい。大人が生徒に対して干渉しすぎず、生徒が主体となって、常識にとらわれない全く新しい視点から他面的に物事を捉えられるようになってほしい。そして、異なる価値観に対してその善さを見出し、それぞれの個性を尊重できるようになってほしいと思う。さらに国際的な問題を自身の課題として捉えられるような自立心をもたせたい。それにより、真の国際人とも呼べるような人材育成につながるだろう。多種多様な価値観を受け入れられる自立的な良心を持ち合わせた人物こそが、国際交流の場において活躍できるのである。そして、この教育理念はまさに新島が大切にしていた教育理念と類似する。今を生きる私の志は、約 100 年前の時代を逞しく生き抜いた新島の志と一体化しているのだ。

学校を設立するには、きっと多くの困難があるだろう。だが新島の様に自分の信念を貫き、自らの志を実現させるための弛まぬ努力を続け、次世代を担う先進的な人材を育てるだけでなく、自らも教育者として国際的に幅広く活躍できる人になりたい。